花束に込められた願い

kotorinakisekai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花束に込められた願い

【Ｎコード】
Ｎ２１２１Ｑ

【作者名】
ｋｏｔｏｒｉｎａｋｉｓｅｋａｉ

【あらすじ】
「三年以内に帰ってくる」恋人である男はそう言って旅立ったが、その約束は守られなかった。
男が旅立った町で内乱が起こったのだ。あっという間に三年が経ち、内乱が収まっても男は帰ってこなかった。
待ち続けていた女は岬に行ってある賭けをする。
【この作品は他サイトと二重投稿しています】

花束を持った女が岬に立っていた。女の前に広がっているのは大きな海。これから女が花束を投げようとしているのだと容易に想像できた。その女の表情は暗い……。

女には恋人が居た。恋人の男は画家の卵だった。小さい頃から絵を描くのがうまく、将来は画家になるのだとよく言っていた。女はそんな男を愛していた。

男は五年前に町を立ち去った。大きな町に絵の勉強をするためにである。女は悲しかったが、その当時恋人でもなかった自分に男を止める資格があるはずもない。女にできるのは今と同じで、花束を作り、旅立つ男に渡すだけ……。

しかし、男は花束を受け取る瞬間女を抱きしめた。

『画家として君を養えるくらいに力をつけたら、この町に帰ってきて一番に君に会いに行くよ。その時、君がまだ独りでいたなら、僕と結婚して欲しい』

女にしか聞こえない微かな声で、しかし力強い声で男はそう言った。

女はその時どれだけ嬉しかっただろう。その気持ちを言葉で表すことはできなかった。だから、女は男にくちづけをした。そして、それが婚約になった。

『僕は三年以内に帰ってくる』

男はそう言って旅立って行った。しかし、その約束は守られなかった。

男が訪れた町で一年後に内乱が起こったのである。

国王が乱心し、国民を苦しめ始めた結果に起こった内乱だった。幸いその時男は難を逃れていた。しかし、男がその時よこした手紙は、女を苦しめることになった。

『君も知っていると思うが、この町で内乱が起こった。私は無事だ。安心して欲しい。しかし、私はこの町から逃げ出すことはできない。いや、逃げ出すわけにはいかない。なぜなら、私は内乱を起こしたメンバーの一人なのだから……』

それから、国王の圧政の内容や、女への愛などが綴られていたが、女の頭には入ってこなかった。

「彼が……内乱の中心に……？」

女はすぐに男のいる町に行こうとした。しかし、当然ながら町の人達が女を止めた。『男を信じて待ってはどうか？』町の人たちは口を揃えてそう言うのだ。それでも女は行こうとしたが、男のいる町への途中に兵士が常駐するようになって、結局女は男のいる町に行くことはできなかった。

それから女の地獄の時間が始まった。

最初の頃は運び屋を通して頻繁によこしていた手紙が、どんどん少なくなって行った。

そうしているうちに、男が旅立ってから二年が経ち、内戦はさらに激しくなって行くうちに三年が経った。その頃にはもう男からの手紙は来なくなっていた。

男が旅立ってから四年が経つと、市民と国王との間で和解が成立した。内乱が終わったのである。しかし、男は結局帰ってこなかった。

皆は今から絵の勉強をやり直しているのだろうと女を慰めたが、それなら手紙が一通も届かないのはおかしい。女の不安は募るばかりだった。

そしてついに男が旅立ってから五年が経った。

女は男が好きだった花を集めて花束を作り、男が町で最も愛した岬にやってきていた。一つ賭けをするためである。

「天上に居られます神様！　聞いていますか！　私はこれからあなたに向かって彼が愛した花束を投げます。それを気に入って受け取

ってくださるなら、どうか彼を返してください！　花束が気に入らず、受け取れないというなら、彼の魂を、彼が最も愛したこの海に沈めてください。彼が愛した花々と共に！」

女は神を信じていなかった。しかし、何か叫ぶ言葉が……宣誓する言葉が欲しかったのだ。

天上に向かって投げた花束が、風に乗るなり、鳥に運ばれるなりして、天上に届いたなら彼は帰ってくる。逆に花束が海に落ちたのなら彼は死んでおり、花束はそのまま彼への弔いとなる。そう言う賭けを今から女はしようとしているのだ。

あまりに部の悪い賭け。しかし、だからこそ意味がある。

「とどけ！　私の彼への思い！」

女は力の限り花束を強く空へ投げた。それは風に乗り、天上にまで届くかと思われたが、やがて重力に支配され、ゆっくりと海面に向かって落下して行った……。

「う……うわぁあああああああん！」

女は泣いた。深い悲しみの感情に襲われて……。

花束は届かなかった。花束は海面に落ち、男の死を悼んでいる。花を結んでいた紐は解け、花達はばらばらになって海深くへ沈んで行った。弔いの花として……。

そうしてしばらく泣いていると、女の方に毛布がかけられた。きっと町の人の誰かだろう。花は町の人達にもらったから心配になってきてくれたに違いない。女はそう思って後ろを振り返った。

「やあ……」

そこには困った顔をした彼が……たった今死んだことになったはずの恋人が居た……。

「どう……して？」

「ただいま。二年遅れてしまったけれど、結婚の約束を守りに来たよ」

「だって……だって……。ま、待っていたんだから！！」

女は男に抱きついてキスをした。

男は生きていたのだ。激しい内戦の中を生き残ったのだ。ではなぜ帰らなかったのか？　それは、国王が本当に和解を守るか見届けるためだ。男は人々から隠れて、ひそかに王室を監視していた。そのうちに国王は死に、市民の中で政府機関が樹立して、今度こそ町は完全に解放された。

女にとってそんなのはどうでもいいことだ。恋人が返ってきた。それが何より重要なのだ。

「何の仕掛けもしていない花束が、天上にまで届けば僕が帰ってくる。相変わらず欲が無いというか、自分に厳しいというか……」

「だって、そのくらいの奇跡が起きなければ、あなたが帰ってこないと思ったんですもの！！」

「奇跡みたいなことが本当になれば、自分のちっぽけな願い事くらい叶ってもいいはずだ。実に君らしい考え方だよ。そして、誰よりも愛おしい……」

岬にはいつの間にか町の人達も集まっていた。

男は自分が用意していた花束を女に渡す。女はそれにキスをしてから町の人達に投げた。それは花嫁が投げるブーケのようだった。

いや、ようだったではない。それは間違いなくブーケだったのだ。男はその日女に渡すための結婚指輪も用意していたのだから……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2121q/

花束に込められた願い

2011年8月3日03時23分発行